

326

132

本斗港ノ修築ニ就テ



始

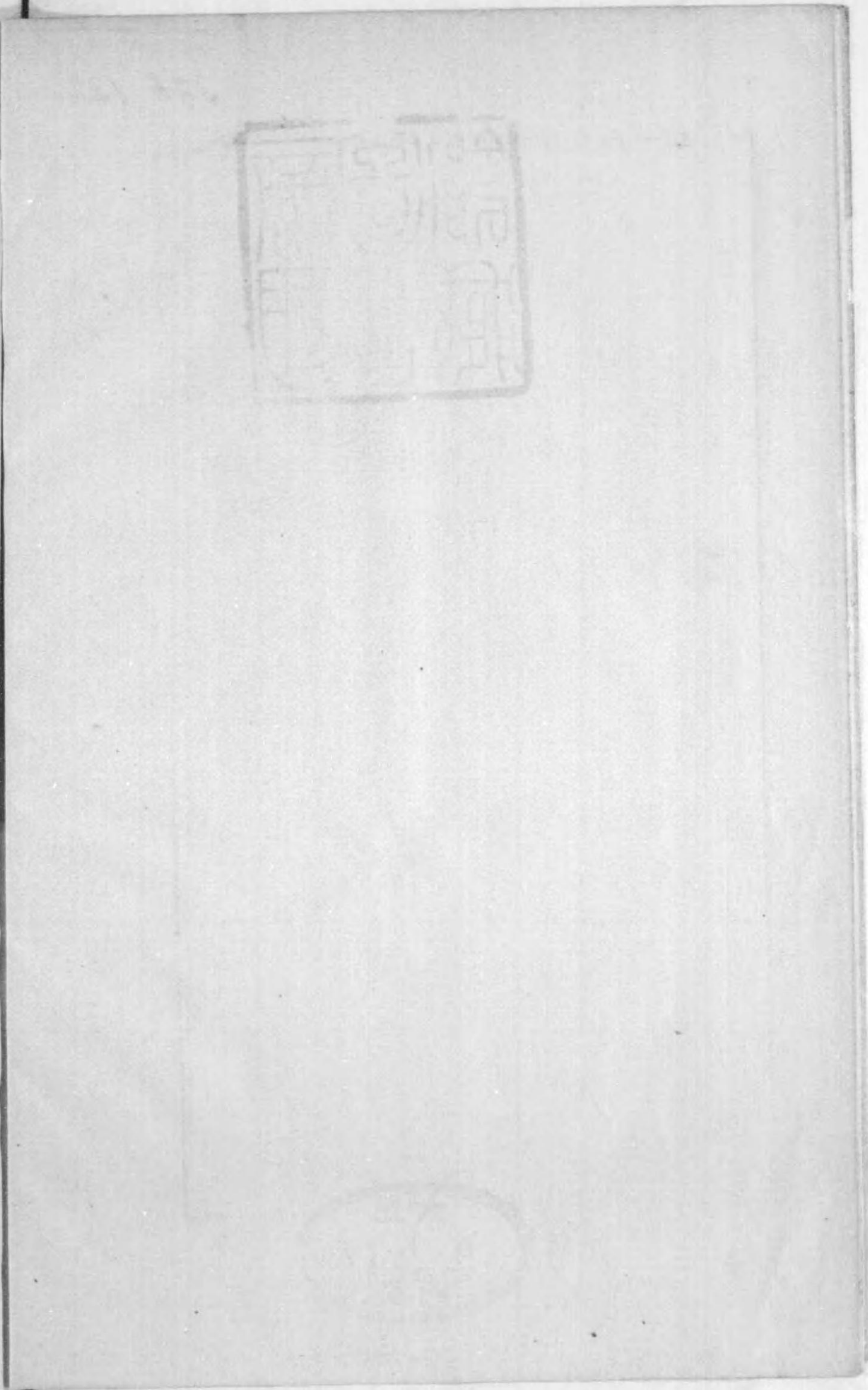
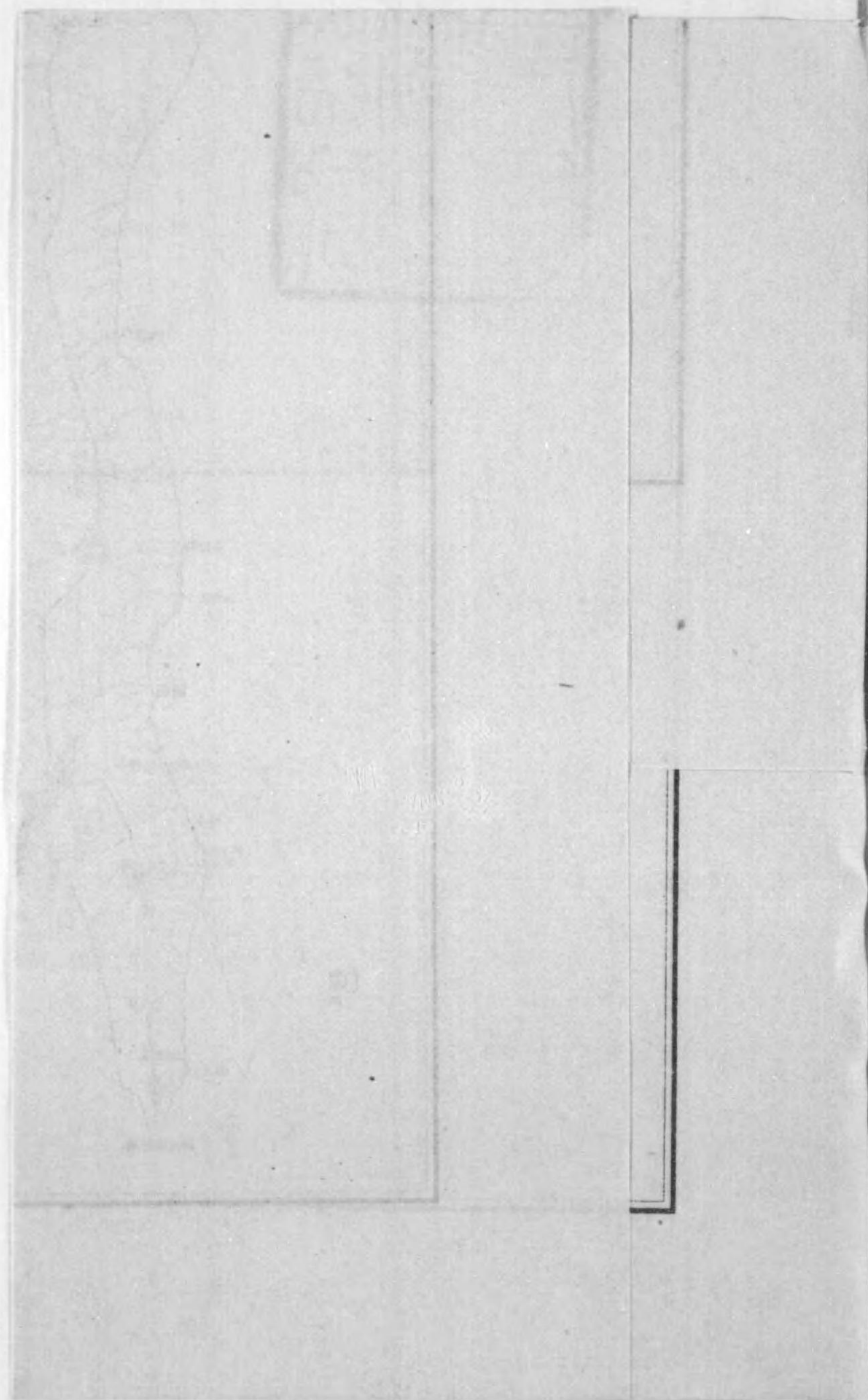


納本

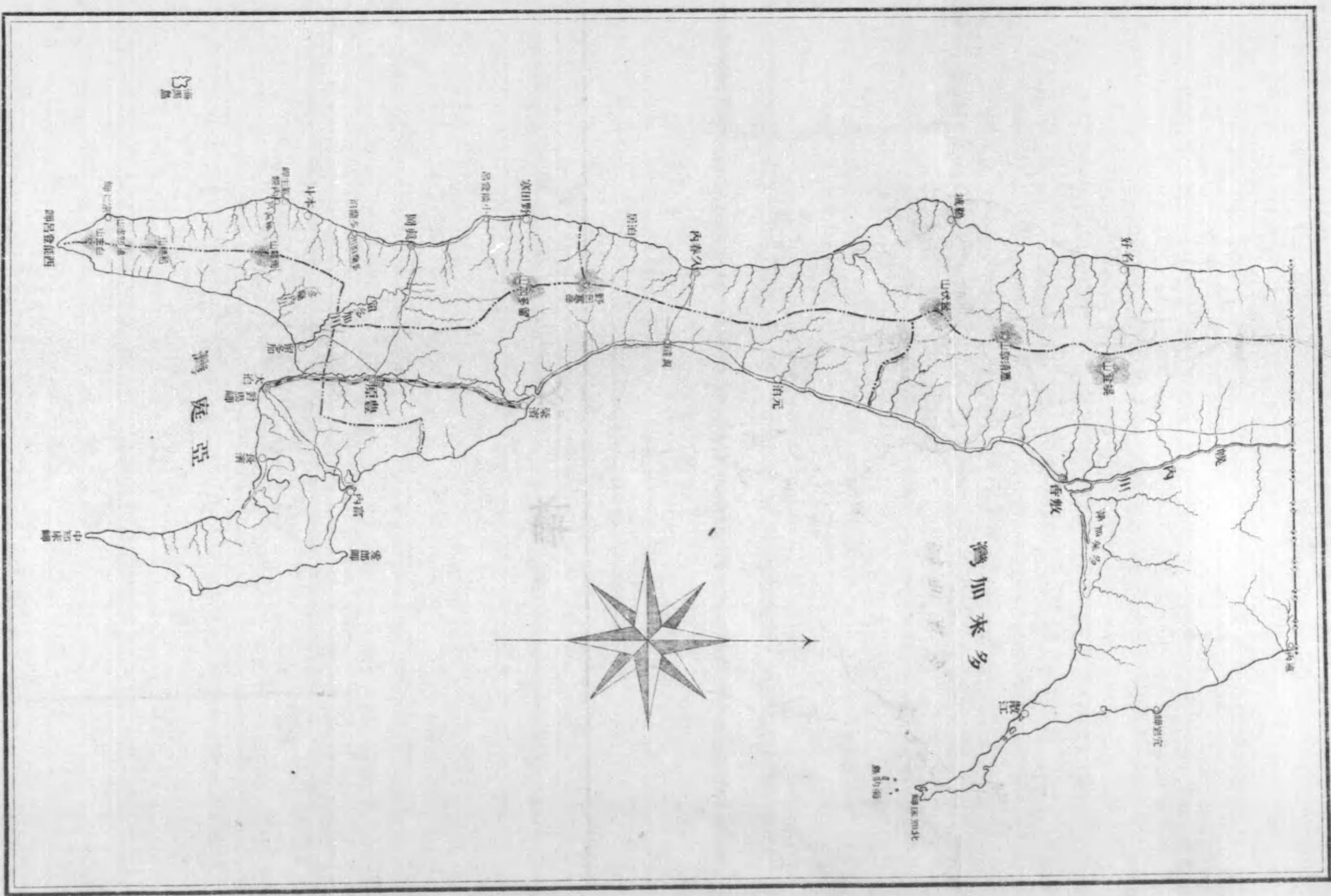
本斗港ノ修築ニ就テ

326-132

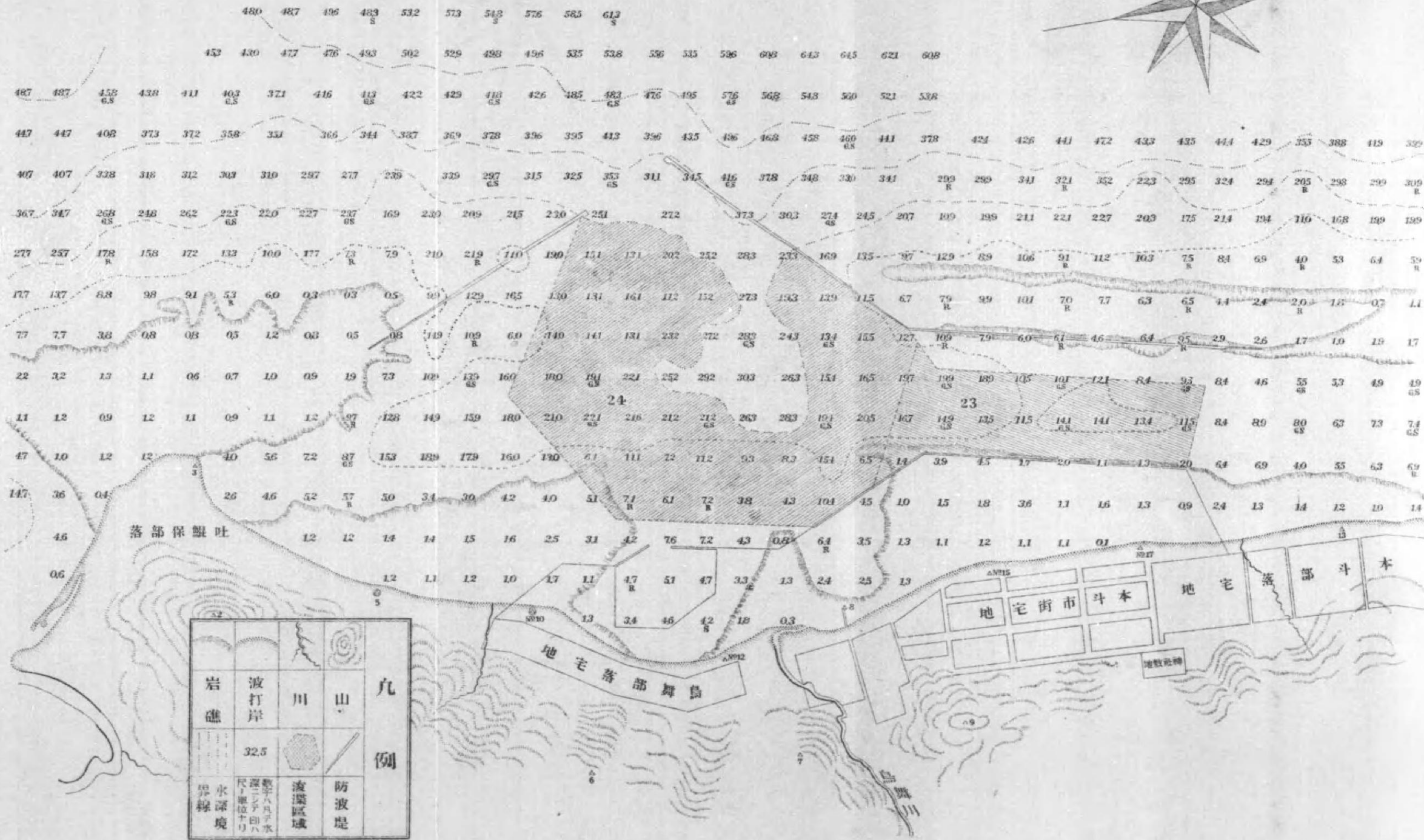




太棒



圖面平築修港斗本



岩礁	波打岸	川	山	凡例
水深	浪濺區域	防波堤		



本手

本斗港ノ修築ニ就テ

目次

第一	樺太ノ地勢	一
第二	築港ノ必要	二
第三	港灣ノ選定	三
第四	本斗港ノ調査	五
	風力及風向	
	對岸距離及波濤	
	潮汐及潮流	
	結氷及流水	
	陸上及海底地質	
	飲料水及船舶用水	
第五	設計ノ概要	八
	港口及港域	
	防波堤ノ築設	
	浚渫工事	
	埋立工事	
	岸壁工事	
	工用材料	



第六	碇繫船舶數……………	一〇
第七	工費……………	一〇



本斗港ノ修築ニ就テ

第一 樺太ノ地勢



邦領樺太ハ北緯四十五度五十四分ヨリ北緯五十度ニ至ル延長約百十六里、面積二千三百餘方里ニシテ、南北ニ長ク東西ニ狭ク、海岸線ハ概ネ一直線ニシテ灣形ニ乏シク、西海岸ノ如キハ其ノ最南端西能登呂岬ヨリ北方國境ニ至ル間殆ト子午線ニ平行シ、東海岸ノ北半亦概ネ一直線ヲ畫ケルカ如ク、唯其ノ最東端ニ北知床岬アリテ多來加灣ヲ擁シ、南端ニ中知床岬アリテ西能登呂岬ト相對シ、亞庭灣ヲ抱擁セルモ灣内廣濶ナル爲港灣トシテノ價值甚タ尠シ、而シテ海岸ニハ高サ百尺乃至二百尺ノ段丘直立シ海ニ臨ミテ懸崖ヲ爲シ、汀邊ヨリ百間乃至二百間ハ概ネ礁脈ニシテ、干潮時ノ水尋辛ク膝ヲ没シ直下シテ水深ヲ増加ス、礁脈ハ溪水ノ流入スル所陷落シ小灣形ヲ爲スモ、僅ニ小舟ヲ入ルルニ足ルノミ、樺太沿岸

ノ地勢概ネ斯ノ如クナルヲ以テ天然ノ港灣無シト言フモ敢テ過言ニ非サルナリ

第二 築港ノ必要

由來拓地殖民ノ根本ハ運輸交通機關ノ設備ニ在リ、南樺領有後既二十年、移民ノ招徠ニ利源ノ開發ニ畫策經營スル所尠ナカラスト雖、其ノ効果未ダ十全ナラサルハ主トシテ此ノ點ニ於ケル缺陷ニ外ナラス、近ク之ヲ北海道臺灣ノ事例ニ徵スルモ、其ノ異數ナル發達ハ蓋シ運輸交通機關ノ整備ニ在リ、故ニ我樺太ノ拓殖モ亦運輸交通機關ノ施設ヲ以テ先ツ其ノ第一要義ト爲ササルヘカラス、殊ニ樺太ハ地理的關係ニ於テ海上連絡ノ完備ヲ期スルノ緊要ナルユト他ニ比例ナク、況ヤ冬季ニハ結氷流水アリ、夏季ニハ濃霧アリ、加フルニ北海ノ常トシテ一タヒ強風襲來スレハ天候ノ險惡數日ニ涉リ、爲ニ船舶ノ航行ヲ妨ケ危險ヲ伴ヒ確實ナル交通ノ連絡ヲ保ツ能ハサルユト約半歳ノ久シキニ及フ、故ヲ以テ住民ノ多クハ所謂越年物資ヲ貯藏スルノ必要アリ、商工業者ハ約六箇月間ニ販賣又ハ消費スル一切ノ物資ヲ準備セサルヘカラス、而シテ其ノ生産品ハ空シク之ヲ倉庫ニ收藏スルノ外ナキヲ以テ、金融杜絶シ物價勞銀ノ騰貴ヲ來シ、産業ノ發達ヲ阻害スルユト極メテ鮮少ナラス、之レ樺太開發ノ一大障害ニシテ、此ノ障害ヲ除却スルニ非スンハ、林産ニ鑛産ニ將タ水産ニ如何ニ多大ノ利源ヲ有スルモ、到底之カ開發ヲ望ミ得ヘカラサルユト多言ヲ要セスシテ寔ニ明カナリ、本島領有後十星霜著シキ産業ノ發達ヲ見サル所以茲ニ在リ、之レ多年官民ノ均シク不凍港ノ築設ヲ望ンテ止マサル所以ニシテ、西海岸ニ一ノ不凍港ヲ修築スルハ實ニ樺太現下ノ急務タリ

第三 港灣ノ選定

築港候補地トシテ選定シタルハ大泊、眞岡、内幌及本斗ノ四港ナルモ、大泊ハ冬季堅氷蔽塞シ到底不凍港トシテ修築スヘキニアラス、又内幌ハ陸ニ平地ナク懸崖甚タ急ニシテ崖下ノ海邊幅員ニ乏シク、海上ノ平磯亦甚タ狭少ナルノミナラ

ス、椎内川ヨリ吐出スル土砂海岸ニ多大ノ砂丘ヲ爲セルニ見ルモ、土砂ノ吐出量極メテ大ナルコト明カニシテ是亦築港ニ適セス、而シテ眞岡ハ大泊及内幌ニ優レルモ其ノ港口北西方位ニ在リ風勢最モ險悪ナル北西風ヲ遮蔽スルコト能ハス、加フルニ港内狭少海底多岩ニシテ投錨ニ適セス、假ニ之ヲ修築スルモ利用シ得ヘキ港域甚タ狭ク樺太ニ於ケル主要連絡港トシテ移出入貨物ヲ吞吐スルニ足ラス、而モ之カ修築ニ比較的多額ノ經費ヲ投下セサルヘカラス、而シテ後方西部ニ横ハル山脈峻險ニシテ中央トノ連絡甚タ容易ナラス、之ニ反シ本斗ハ西南ニ氣主岬ヲ控ヘ能ク西南風ヲ遮蔽スルコトヲ得ルノミナラス、海中約二百六十間ヲ隔テテ陸地ト平行セル礁脈アリ俗ニ長瀬ト稱ス、延長數百間干潮時波間ニ隱見ス、長瀬ノ南方約二百間ノ地點ニ亦一ノ礁脈アリ、長瀬ト相對シテ港口ヲ爲ス、即チ本斗ハ南北ヨリ自然ノ防波堤ヲ以テ抱圍セルニ依リ、之ニ人工ヲ加フルトキハ比較的寡額ノ經費ヲ以テ安全ナル防波堤ヲ築設スルコトヲ得ルハ勿論、港内ノ水尋深キハ三十尺ニ達シ淺キモ十尺ヲ下ラサルヲ以テ浚渫ヲ要スルコト

尠クシテ優ニ港域十六萬坪ヲ得ヘク、尙將來必要ニ應シ之カ擴張ノ餘地充分ナリ、而シテ此ノ地氣溫ノ降下甚シカラス、海水ノ結氷スルコト稀ニ、氷塊ノ流來スルコト尠ク、背後陸上ノ連絡亦極メテ容易ニシテ、後方吐鯤保川ノ流域ニ沿ヒ、直ニ多蘭内、留多加ノ二大沃野ニ出ツルヲ得ヘシ、之ヲ要スルニ本斗ハ啻ニ築港上優レルノミナラス、利源開發ノ見地ヨリスルモ前記他ノ諸港ト同日ノ論ニアラス、之レ本斗港ヲ選定シタル所以ナリ

第四 本斗港ノ調査

風力及風向 本廳測候所ノ觀測ニ依レハ西海岸地方ノ平均風速度ハ秋冬ノ候大ニシテ夏季小ナリ、而シテ夏季ハ風力甚タ弱ク最大速度ト雖十八米突ニ達スルコト極メテ稀ナリ、暴風雨ハ晩秋初冬ノ交最モ多ク、冬季ハ強風烈風ノ度一箇月二十五日ニ及フコトアリ

西海岸一帯ノ風向ハ、四月ヨリ十月ニ至ル七箇月間ハ南風多ク、其ノ他ノ五箇月

間八年ニ依リ異動アリト雖、主ニ東北風ニシテ初冬ノ候西又ハ西北ニ偏ス、今大正二年及大正三年ノ平均風速度、最大風力(米/秒)及烈風以上ノ日數ヲ舉クレハ左ノ如シ

月次	區分	大正二年				大正三年			
		最大風力及風向	平均風向	風向同數	濃霧日數	最大風力及風向	平均風向	風向同數	濃霧日數
一月	北北西	北七六東	北七六東	三	北七六東	北七六東	三	三	
二月	北北西	北七六東	北七六東	三	北七六東	北七六東	三	三	
三月	北北西	北七六東	北七六東	三	北七六東	北七六東	三	三	
四月	北北西	北七六東	北七六東	三	北七六東	北七六東	三	三	
五月	北北西	北七六東	北七六東	三	北七六東	北七六東	三	三	
六月	北北西	北七六東	北七六東	三	北七六東	北七六東	三	三	
七月	北北西	北七六東	北七六東	三	北七六東	北七六東	三	三	
八月	北北西	北七六東	北七六東	三	北七六東	北七六東	三	三	
九月	北北西	北七六東	北七六東	三	北七六東	北七六東	三	三	
十月	北北西	北七六東	北七六東	三	北七六東	北七六東	三	三	
十一月	北北西	北七六東	北七六東	三	北七六東	北七六東	三	三	
十二月	北北西	北七六東	北七六東	三	北七六東	北七六東	三	三	

對岸距離及波濤 本斗港ハ西方韃靼海峽ヲ隔テテ露領沿海州ト相對ス、其ノ最

モ遠キ所約百海里、中間何等ノ障屏ナキヲ以テ波濤直進スト假定シ「ステペンソ」氏ノ算式ニ依リ波濤ノ高サヲ計算スルトキハ、大約十五尺ヲ超ユルコトナキモ波濤ノ高サハ獨リ對岸距離ノ遠近ノミナラス、近傍ノ地形水深風力等ニ依リ異ナルヲ以テ、安全ヲ期スル爲メ築堤位置ニ於ケル波ノ高サヲ十五尺ト推定セリ

潮汐及潮流 風浪ノ爲メ寄スル最高潮ハ平均大千潮面上二尺六寸、低潮ハ平均

大千潮面下四寸五分ニシテ、潮流ハ高潮ニ於テ北流シ、低潮ニ於テ南流ス、而シテ北流ハ南流ヨリモ速度早ク、南北流共ニ千潮ノ境ニ於テ漸次冲出スルモノノ如ク、今日迄ノ觀測ニ依レハ強風ノ當日ヨリモ其ノ翌日ノ速度大ニシテ、一時間一海里四分ノ一ヲ算ス

結氷及流氷 本斗港内ノ結氷ハ例年一二月ノ嚴寒時稀ニ之ヲ見ルコトアルモ、

船舶ノ航行ニ支障ナク、又流氷ハ例年三月下旬ヨリ四月初旬ノ交浮游スルコト

ナキニアラサルモ直ニ流去スルヲ常トス

陸上及海底地質 本斗附近一帶ハ概ネ粘盤岩ニシテ、平地ハ粘土及壤土ヨリ成リ、沿岸ハ粘盤岩又ハ砂礫トス、海底ノ地質ハ吐鯤保附近ハ泥砂ニシテ掘鑿二十尺ニ及フモ仍岩盤ニ達セス、鳥舞、本斗ハ岩礁ノ外總テ玉石ヲ混セル泥砂ニシテ、七八寸乃至十數尺ノ下層粘土ヲ經テ岩盤ニ達ス、載荷力ハ每平方尺ニ對シ二噸内外迄ノ重量ヲ加ヘ、吐鯤保灣内ニ於テ一尺四寸ノ没入ヲ最多トシ、其他ハ概ネ五寸内外ニ過キス、岩礁ハ總テ粘盤岩ナルモ水深増大スルニ從ヒ粗キ砂岩トナリ岩質堅緻ナラス

飲料水及船舶用水 本斗港ニ流入スル鳥舞川ハ細流ナレトモ、水清ク水量充分ナルヲ以テ、市街ノ上水ニ適シ又船舶ノ給水ニ充ツルコトヲ得

第五 設計ノ概要

港口及港域 南北ニ防波堤ヲ築設シ兩堤頭ノ距離六百尺ヲ港口トシ港域約十六

萬坪ヲ抱擁ス

防波堤ノ築設 防波堤ハ南北ノ二トシ、南堤ハ吐鯤保沖合ニ於ケル岩礁ヲ基礎トシ西北北ノ方向ニ築設ス、延長二百四十五間水深二十五尺ノ箇所ニ至ル、北堤ハ俗ニ長瀬ト稱スル天然ノ礁脈ヲ利用シ、其ノ上ニ築設シ更ニ右折シテ西南西ノ沖合ニ突出ス、延長約六百二十間水深三十六尺ノ箇所ニ達ス

浚渫工事 浚渫ヲ要スル港内面積ハ大約十二萬六千坪ニシテ低水面下二十四尺ニ浚渫スル區域約十萬千坪、一十二尺ニ浚渫スル區域約二萬五千坪トス

埋立工事 第一埋立ハ鳥舞川口ヨリ南ニ約二百間沖出約百間面積約二萬六千坪ニシテ專ラ作業用地ニ充當シ、仍約八千坪ノ船澗ヲ設ケ工事用船舶ノ繫留場トシ、工事竣成ノ曉ハ之ヲ公共用船澗トス

第二埋立ハ本斗地先ニ於ケル約四萬坪ニシテ岸壁ヲ築設シ專ラ海陸運輸ノ便ニ供ス

岸壁工事 荷役ヲ便ナラシムル爲水深二十二尺ニ浚渫セル部分ノ海岸岩盤上ニ

混泥土塊ヲ以テ、岸壁延長約二百間ヲ築設シ低水面上七尺ニ達セシム

工事用材料 石材ハ本斗ヲ距ル西南約二十六海里ノ海馬島ヨリ採收シ、混泥土用砂ハ本斗附近ニ於テ採取ス、共ニ優良ナルモノヲ得ルコト極メテ容易ナリ

第六 碇繫船舶數

築港完成後本斗港ニ出入スル船舶ハ約四十萬噸ヲ下ラサルヘク、尙産業ノ發達ニ伴ヒ漸次移出入貨物ノ數ヲ増加シ出入船舶亦増加スヘキヲ以テ、本斗ニ寄港スル船舶ヲ約五十萬噸ト推定シ、其ノ三十分ノ一即チ約一萬七千噸ヲ一時ニ港内ニ碇舶スル船舶ト看做シ、二千五百噸級ノ船舶約七隻及少噸數ノ船舶數隻ヲ容ルルニ足ル港域ヲ有セシムルノ計畫ナリ

第七 工費

本斗港ノ修築費ハ總額二百五十萬圓ニシテ大正五年度以降九箇年度ノ繼續費ト

ス其ノ費目及年割額左表ノ如シ

本斗港修築費年割表

費目	年度割	
	五年度	六年度
俸給	八、五七四	八、五七四
事務費	一八、七四五	一八、七四五
廳費	五、五二〇	五、五二〇
旅費	三、六〇〇	三、六〇〇
雜給及雜費	九、五五五	九、五五五
工事費	一七、七七八	一七、七七八
防波堤費	〇	三〇、〇〇〇
波濼費	〇	〇
計	八五、九三三	一七二、一八九
計	九、四四五	一七一、八八九
十三年度	〇	一七、八五〇
十二年度	〇	一七、八五〇
十一年度	〇	一七、八五〇
十年度	〇	一七、八五〇
九年度	〇	一七、八五〇
八年度	〇	一七、八五〇
七年度	〇	一七、八五〇
六年度	〇	一七、八五〇
五年度	〇	一七、八五〇
計	〇	一七二、一八九

計	建 物 費	船 舶 費	器 械 費	岩 壁 費	埋 築 費
100,000	1,700	1,500	1,200	0	1,600
100,000	3,000	11,000	110,000	0	0
100,000	1,000	3,000	1,000	0	0
100,000	0	3,000	1,000	0	0
100,000	0	11,000	1,000	0	0
100,000	0	0	0	0	0
100,000	0	0	0	65,500	5,000
100,000	0	0	0	55,500	5,000
100,000	0	0	0	65,500	5,000
100,000	0	0	0	65,500	5,000
100,000	3,100	1,500	1,200	1,600	1,700

大正五年一月七日印刷
大正五年一月十二日發行

樺 太 廳

印刷者 東京市芝區愛宕町三丁目二番地 植田庄助
印刷所 東京市芝區愛宕町三丁目二番地 東洋印刷株式會社

326

132

終

